

## ☼ 観察者と保育者の対話 (1)

保育の当事者と傍から見ている人とは、どこまで共通のものを感じ、どのようなものを経験しているのだろうか。今月から、「観察者と保育者の対話」と題して、保育を見た人の観察記録と、その場面で保育していた人の返事を掲載する。さらなるレスポンスが続いてこそ本当の「対話」になるのだろうか、今回は、二人の「語り始め」を紹介する。  
(編集部)

### ……… 観察者から保育者へ

観察者：J・H（お茶の水女子大学）

十二月の、二学期最後の保育の日。天気は晴れ、気温は低い。

四歳児クラスA組の保育室に朝から観察に入った。部屋の中央に厚紙で作った高さ一メートルぐらいのクリスマスツリー、その横に子どもの椅子をずらりと並べ、薄板を渡してあるのは「お寿司屋さん」の長いカウンターのようなのだ。そのエリアで遊ぶというより、そこを守るかのようにうろうろしているS男がいた。そのエリアのものに触れたり、参加しようとしたりする子どもが近づくと、何かと「だーめ」を繰り返し、手が出ることも多

い。争いがひどくなると、担任のI先生が間に入っても、なおたたこうとするようなところがある。集中する遊びを見つけあぐねているように見えた。一人でいてもヒーローのようにシュツシュツとポーズをとる様子が目立ち、私にはそれが、自分らしく振舞えないで何かに自分のイメージを託すことで自分を保っているような姿に見えてしまう。他の男児はS男とそれなりにかかわって遊んではいろのだが、すぐたたいて怒るS男との距離を測っているようであった。

その状況が変わったのはS男が園庭に出てからであ

る。外に「宝物」があるから見にきてと誘われ、ふらふらと他の子どもたちと外に出た後、砂場へ。高さ八十七センチメートルぐらいのきれいな砂山ができています。I先生が思い切ったように「今日で二学期がおしまいだから、これをみんなで壊してしましましょう」と言った。

もう何日も残してあった山らしい。「壊して」という言葉が先生の口から出ることの意味が、子どもたちには最初は飲み込めなかったようだった。しかし、本当に壊していいとわかると、蹴ったり、のしかかったりする男児たち。

S男も初めはヒーローのポーズをとって壊していたりもしたが、しばらくしてその横にある高さ三十センチメートルぐらいの小さい山のそばにいた。シャベルで砂をすくっては固めている。そばで見守っていた先生の言葉によると、K男が作っていた小さい山も壊してしまつたのでそれを「直す」ことにしたらしい。中指に光る、先ほど室内で作ったヒーローの指輪をはめた左手は使わずに、右手で小さいシャベルをつかみ、何度も砂をす

くつては小山の上ののせてシャベルの背で固めるのを繰り返す。高くしているという感じではない。砂をのせては固めるのだが、そのたびに上の砂が横に落ちて、高さはあまり変わらないのである。それでも「まだまだ」「まだまだ」と何度も言いながら壊れた小山を「直している」。小山を壊された(?) K男も腕組みなどして横で見ているが、怒って見ているというより満足そうである。

先生が「もうそろそろおしまいにしよう」と言いかけた時、途中から加わったR男が「こんぐらいにするの」と小山の頂上より一メートルほど上方を手のひらで示すと先生が笑いながら「え、直しているだけでしょ」と答える。そうするとS男たちは笑って「こんぐらい」「こんぐらい」と、小山の上に手をかざして言い合う。

R男が「よし、がんばるぞ」と気合を入れると、S男は「ねんちようたちがぶっこわしたらどうする」とシャベルの手を止めずに応える。R男が「もうぶつとばしてやる」と言うと言い合う。先生がまた呼びにくる

が「直してんの〜」「直してんの〜」という。先生が「それは直してらんじゃないでしょう」と言うとう、S男は「作ってんの」と小さな一言。そして「ね〜、これ残しときたい」と言い残して保育室に入る。

ようやく砂場でS男らしさが垣間見えた気がする。砂をかけては固めるが、山がいつこうに高くなる様子が見えなかつた。S男の姿に重なる見えた。

## ……… 保育者から観察者へ

保育者・M・I

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

この日S男は早めに登園すると、保育室中央においてあつたクリスマスツリーをすぐに見つけた。S男はクリスマスツリーを自分が好んで遊ぶエリア(ままごとコーナー周辺)に運び入れて、そのエリアを椅子、衝立、積み木などで囲み始めた。

S男は、室内で遊ぶ時は大抵、物で囲んだりして自分の居場所を確保することから始める。自分のエリアに一人もしくは二人ぐらいの仲間を誘い込み、そのエリアをベースにして遊ぶのである。どのように過ごすかという点、ウルトラマンなどのヒーローになったり、時には警察になったりしているのであるが、やっている内容は、

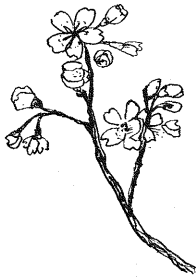
たわいものないおままごとだったりするのである。その姿から、観察者の指摘通り、幾重にも自分を防備しなくては、集団の中で自分を保てないS男の心の危うさを私も日ごろから感じていた。

この日S男が囲んで確保したエリアでは、一週間前ぐらいから数人の男児が「寿司屋さん」をすることが続いていた。S男もそのメンバーに入っていることが多く、この日もまた寿司屋をするつもりだったらしい。しかし、場所を確保しカウンターは作って見たものの、一人しかメンバーが加わらず、寿司屋の遊びはすぐに立ち切れた。そうすると、S男の気持ちは場所やその場

にある物を確保することにのみに向かっていった。そのエリアに入ってくる相手にすぐでみたり、手をあげてみたりと、いつも以上に守ることに必死になっているS男がそこにいた。

そのような時に、U男の「お山（園庭の高台の部分）に来て」という誘いが舞い込んだ。どちらかというと室内派のS男が、U男の誘いを受け自分から外に出ようとしたのは、私には意外に感じられた。S男の中でも、自分の「今」を乗り越えたいという気持ちはどこかにあったのだろうか。後を追う形で、私も外に出た。私が山に行くのとすれちがいざまに、S男は山から降りてきた。私が少しして山から降りると、S男は砂場にいた。

数日前に男児の多くがかかわって作った砂山を壊して、二学期の保育の区切りにしよう、私の方から子どもたちに誘いかけてみた。S男は蹴ったり登ったりして砂山を壊し



にかかった。何日もかけて固めた山は、そう簡単には壊れなかった。S男はだんだんに壊すことに夢中になっていった。その姿を見て、壊すところからかわかれたのは、S男にとって良かったのかもしれないとふと感じた。というのは、山作りをしている時には、様子を見に近寄ってきたものの、S男はその輪に加わることはなかったからである。

私はその後部屋の中に入ったが、観察者の記録を見ると、勢い余って小さい山も壊してしまい、S男はすぐにその山を元通りに直し始めていたようだ。すつと山作りに取りかかれたのは、その前に山を壊した体験というのも、意味をもっていたのかもしれない。また、S男にとっては、壊すところで終結ではなく、小さくてなかなか高くない山でも構築して終えられたことがとても大きな意味があったのだと考える。それもその日、取っ組み合いのぶつかり合いをしていたR男たちのために直すという状況が、等身大のS男で臨めた大きな要因かもしれない。